

富山市立図書館

# 図書館だより

第54号  
2012.10

## これからの子ども図書館

### 前橋子ども図書館見学記

全国には、国立国会図書館国際子ども図書館をはじめとして、子どもや親子が本に親しんだり、楽しく学ぶための、子ども図書館があります。

富山市でも、平成25年3月、C i Cビル4階に「(仮称)子ども図書館」がオープンする予定です。

今回は、先進的な子ども図書館のひとつである、前橋子ども図書館をご紹介します。



外観

### 1. 前橋子ども図書館とは

前橋子ども図書館は、平成19年12月、「前橋プラザ元気21」の2階にオープンしました。

「前橋プラザ元気21」は、地上7階、地下2階からなり、公民館やにぎわい商業課などの行政施設のほか、専門学校、スーパーマーケット、カフェなどの民間施設が入った複合施設です。

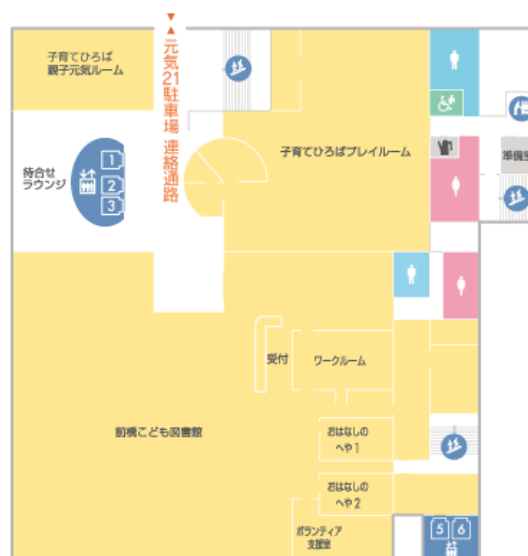
前橋子ども図書館と同じ2階には、子育てひろば（「プレイルーム」「親子元気ルーム」）があります。2階を、「子ども交流プラザ」と位置づけ、両施設で年間に約44万人の利用があります。

### 2. 施設・設備

前橋子ども図書館は、ワンフロアでは、日本最大級の「子ども図書館」です。木調の暖かい雰囲気、のびやかな図書館です。



館内風景



館内見取り図：前橋プラザ元気21 HPより  
<http://www.genki-21.jp/index.html>

## (1) 書架

館内に入るとすぐに、ユニークな形の書架が目をはきまします。

商業施設をリニューアルさせた施設であるため、天井は低いのですが、子どもの目線にあった高さや展示型書架が並び、圧迫感を感じさせません。



また壁面には、絵本作家の荒井良二さんと子どもたちが絵を描き、明るくのびやかな空間となりました。

## (2) トイレ

子育て中の男性も利用できるように、トイレの通路におむつ交換台を設置してあります。また男女トイレに、子ども用トイレを設置しています。トイレのつくりには特に配慮したとのことでした。

トイレ以外にも、子育て世帯への細やかな配慮が感じられます。図書館内には、赤ちゃんを連れた人もゆっくり本が選べるように貸出用ベビーカーが設置されています。

その他にも、ねころび広場、洋室と和室の2つのおはなしの部屋、広いワークルーム、ボランティア室など、目的に応じ多様な場所が準備されていました。

### ●基礎データ●

延床面積	1,563㎡
蔵書冊数	114,998冊
蔵書収容力	約12万冊
駐車場	314台 (全施設共用)

## 3. サービス

前橋こども図書館は、本館の前橋市立図書館から徒歩で10分ほどの距離にあります。

オープンにあわせ、本館の児童サービス機能をすべてこども図書館に移転させました。そのため、前橋こども図書館は、子育て応援施設という目的だけではなく、前橋市の子ども読書の拠点という役割を担っています。

児童図書だけではなく、「育児支援図書コーナー」を設置しています。育児や家庭教育に関する本はもちろん、学校教育、社会教育、料理、手芸、旅行、児童文化、児童文学など幅広い分野の図書を収集しています。

また、「ブックスタート」などボランティアと連携した行事や、群馬県出身・在住の児童文学作家の公演や図書の展示などにも力を入れています。

特に、「子育てひろば」とのサービスの連携は行っていないとのことでしたが、隣接することで相乗効果を生み出しています。

## 4. 富山市における子ども図書館構想

C i Cビル4階に開館する「(仮称) こども図書館」は、屋内ひろばのある子育て支援センターとの複合施設になる予定です。

この複合施設は、皆さまに親しまれるよう「(仮称) とやまこどもプラザ」を愛称とし、両施設が密接に連携しながら、子育ての拠点となる場を目指します。

こども図書館では、絵本やマンガ、紙芝居を始め、子育てに関する図書や雑誌など多様な資料を置き、親子が楽しめる場所を提供します。

また、その工事のため、とやま駅南図書館「ぶらり」は下記の期間休館しています。ご不便をおかけしますがよろしくお願ひします。

(本館 牧田)

〈とやま駅南図書館 休館期間〉

平成24年9月4日(火)～平成25年2月28日(木)  
(予定)

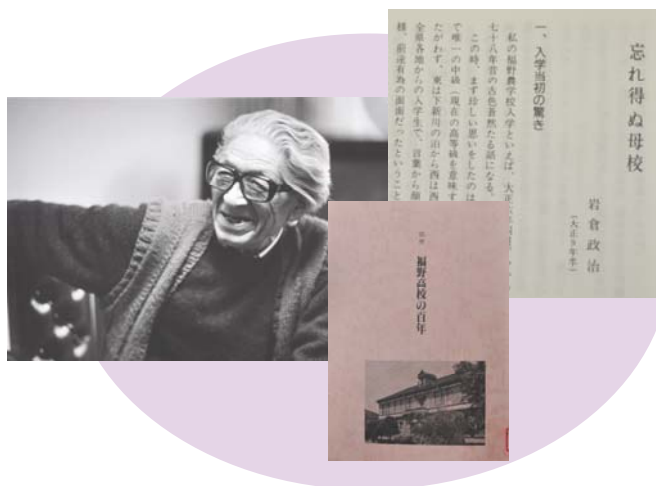
# 岩倉政治文庫の資料 其の二十

富山の農村で生まれ育った岩倉は、自身のふるさとに限りない愛着を抱き、郷土に根ざした文学活動に尽力してきました。今回は文庫内の資料から、その活動の軌跡をたどります。

岩倉は15歳からの3年間を福野農学校で過ごします。岩倉は当時の思い出を、福野高校の記念誌『回想 福野高校の百年』に寄せた「忘れえぬ母校」で振り返っています。「私にとって福農第一の思い出はすばらしい先生たちに恵まれたことだ」と語るように、岩倉は農学校で巡り合った教師と仲間たちにかこまれ、農村文学の基礎と郷土への愛着を育んでいきました。

短編集『波音』のあとがきで岩倉は「さて、こう振り返ってみると、私という小説書きは、あいもかわらず郷土富山を舞台にして、ここでの人々の生を描いてよくも飽きぬものだと思う。」と語っています。その言葉どおり岩倉は、ふるさとである富山を舞台とした作品を数多く発表しています。

砺波地方で起こった宝暦騒動をテーマにした小説『田螺のうた』は、後に舞台脚本『ばんどり騒乱記』となり、昭和54年には富山でも公演が行われました。富山公演について岩倉は公演用パンフレットに「いま私は『ばんどり故郷に帰る』の、あつい感慨をしみじみ噛みしめているところだ。」という言葉を残しており、富山での公演を熱望していたことがうかがえます。



左：1992年に撮影された岩倉の写真  
(裏に「Photo by ©Junichi TANABE」  
の印あり)

右：『回想 福野高校の百年』  
(富山県立福野高等学校同窓会 1995)  
※右上は岩倉の寄稿文

その後、一度東京へ移り住んだ岩倉は、昭和22年に再び富山へ戻ります。当時新進作家として期待されていた岩倉は、富山でも精力的に活動しています。岩倉は、県内の文学同人の世話役をつとめたり、同人誌『現実派文学集団』や『新日本文学』の発行に関わったりするなど、富山の文学活動を活発にするために尽力していました。



『ばんどり騒乱記』富山公演のパンフレット(左)  
と、東京公演の案内ハガキ(右)

富山を愛し、富山をえがき続けた岩倉は、後にその功績を認められていきます。「富山県文化表彰」をはじめ、晩年期には数多くの表彰をうけました。

また、故郷である南砺市井波には、文学碑が建てられており、名実ともにふるさとから愛される作家であることが伝わってきます。

図書館本館では、10月5日～12月28日まで1階展示コーナーにおいて、企画展示「岩倉政治とふるさと富山」を開催しています。今回紹介した資料のほか、当時の写真や直筆原稿などを展示し、岩倉の郷土に対する愛着や、富山での活動とその功績を紹介しています。(本館 山木)



# レファレンスあれこれ

**Q.** 結婚式の三々九度の際に用いられる酒器に、紙で折ったオスとメスの蝶がついている。「雄蝶雌蝶」というらしいが、その折方を知りたい。

**A.** まず、辞典類で「雄蝶雌蝶」について調べてみる。

『日本大百科全書』（小学館）には、「結婚式の杯事（さかずきごと）のときに使う銚子や提子につける、折り紙の雌雄の蝶のこと。通例は金銀や紅白の紙を蝶の形に折り、そこに金銀の水引で蝶の触覚をつけて用いる。婚礼の式場が普通の家に設けられる場合は、両親のそろった男女の子供が選ばれて、そこで新夫婦の杯に同時に双方から酒をつぐ。このため雄蝶雌蝶の名称はもとの意味から転じて、この二人の男女の子供をさしている場合もある」とあった。

次に、実際の折り方が掲載されている資料がないか探してみる。婚礼に使われるものということから、「冠婚葬祭」に区分される資料を書架で調査する。『日本の折形』（誠文堂新光社 2009）や、『暮らしに使える「折形」の本』（PHP 研究所 2007）には、雄蝶雌蝶が銚子や提子に水引で結ばれている写真が掲載されていた。また、銚子には雄蝶を、提子には雌蝶を使うことも礼法の決まりであることも解説されている。

『日本の折形』には、「折形とは日本で古来より行われていた礼法の一つ」で、「贈るものを和紙で包むその方法や、儀式などに用いられる飾りの紙を折る方法の総称」とある。例えば、現在では慶事に金品を包む際、市販の祝儀袋を用いることが多いが、元々は折形によって和紙で品物を包んでいたことに由来する。

上記の二冊にはいずれも、古くは鎌倉時代にさかのぼる折形の歴史や、現代の生活で役立つ「祝い包み」や「かいしき」などの折り方や図版が種類豊富に掲載されていた。

次に、この「折形」をキーワードに当館で所蔵する資料を調査する。『折形の礼法』（大和書房 1978）には、2種類の雄蝶雌蝶の折り方が掲載されていた。

他にも、『四季をよそおう折形』（淡交社 2004）、『折形レッスン』（文化出版局 2005）、『半紙で折る折形歳時記』（平凡社 2004）などがあったが、雄蝶雌蝶の折り方は掲載されていなかった。

そのほか、『包結図説』（国書刊行会 1987）には、雄蝶雌蝶の銚子、提子への取り付け方が解説されていた。『包結図説』は、江戸時代中期の故実家、伊勢貞丈が記した書物を現代語版として復刻した資料である。

伊勢貞丈は、多くの礼法関係の著書を残しており、その一つに武家礼法の書『貞丈雑記』がある。

ここでは、祝いの席の酒器に蝶の折形を飾り付ける理由として、「酒のむ人は蝶の花の露を吸って遊びたのしむ如くせよ、という教えの為に、蝶の折形を付くるなり。瓶子に蝶花形付くるも同じ心なり」と記されている。（『日本の折形』参照）

また、婚礼儀式やそれに関する礼法についての資料についても調査すると、『やさしさが伝わる日本の礼法』（玉川大学出版部 2008）と、『図解小笠原流礼法入門 立ち居振舞い』（中央文芸社 1981）に、長柄・堤飾りと瓶子飾りの雄蝶雌蝶の一例が図示されていたが、折り方については掲載されていなかった。

なお、これらの資料では三々九度（式三献）に使う折形の蝶は、蚕の象徴で蛾を表し、「雄蝶、雌蝶が結ばれ、やがて繭が作られ、その繭から絹が生まれるという生産と生命の維持を意味し、種族繁栄という新家庭を象徴するもの」としている。

折形は、明治以降も、師範学校や高等女学校で教授されたり、教科書でも紹介されるなどして継承されてきたが、戦中戦後にかけて、そのような教育の機会もなくなっていったようである。

（本館 新保）